# パイズリ救世主伝説

パイズリ神拳の伝承者である爆乳少女は
人々のために妖魔と戦う！
一分以内にいかせれば相手が死亡、
いかなければ自分が死亡という
極限のパイズリ戦！

うさぎロボ　著

## １章　とある妖魔の誕生。パイズリで迎え撃つ恋人、しかし及ばず……

小さな村。
古い家の一室。
一人の男がベッドに寝ている。
呻き、シーツを手で握り締めていた。
部屋に女が入ってくる。
男の恋人だった。
手にはナイフ。
「ごめんね……」
ボロボロと涙をこぼしながら、それを男の胸に振り下ろす。
と、そのナイフを男の指が摘まむ。
「あはははは、残念」
「あっ」
「昨日なら、殺せたのになあ」
起き上がる男。
目が、紫の光を放つ。
「ああ、何で妖魔なんかに……やっぱり妖魔病だったんだ……」
「そうらしいな」
妖魔病。
男にだけかかる奇病。
熱を出し寝込む。普通の病気かどうか判別がつきにくい。
しかし相当弱ってくるので、普通の熱でないことは薄々察することが出来る。
バタン、と扉が開く。
「動くなジャック！」
男たち。
手に手にライフルやショットガン。
「あはははははは！」
ジャックが笑う。
「鉄砲で撃たれたら、死ぬなあ」
「そうだ、だから動くな！」
恋人を突き飛ばすジャック。
「さあ、もうマリアには当たらないよ」
ベッドから降りて、両手を広げる。

「さあ、撃ってみろ。この村には……いや、もうこの世界には、一発も弾丸なんてないんだろうけどな」

　青ざめる男たち。

　笑うジャック。

「俺もこの村に住んでたんだ。いや、それ以前に……もうずっと前から、弾丸なんてないことは誰だって知ってるだろ」

「たまに、地下倉庫なんかが見つかって、そこに昔の弾丸が置かれてることが……」

「今は関係ないな！」

　飛ぶ男。虎か何かのような跳躍。男たちに襲い掛かる。

　手刀。

　ゴキ、と音を立てて肩口に入るそれが、何トンもの重みがあるかのように減り込む。

　振るわれる裏拳、別の男の顔面をへこませる。

　熊か何かのような、いや、もっと生物の限界を超えた力。

　それで男たちを叩き殺し、走り去るジャック。

　いや、去ろうとした。

　が、恋人の叫びに振り返った。

　その叫びの内容は、異様なもの。

「パイズリするわ！」

「パイズリか？」

「そうよ！　オッパイで挟んであげる！　いつもみたいに！」

「いいだろう。その代わり、一分でいかせられなければお前を殺す」

　意味不明の言葉を口にするジャック。

　しかし、マリアはまったくそれを聞き返しもしない。

　彼女、いや、この時代の人々にとって、ジャックの話は何の不思議もないものだった。

　妖魔は、不思議なルールを持っている。

　１　妖魔は、女性にパイズリするといわれたら断らない。

　２　パイズリ時間は一分。

　３　一分で妖魔がイケば、妖魔は死ぬ。　イかなければ女を殺す。

「わかってるわ。パイズリで、殺してあげる」

　妖魔と化した人間は重火器でもないと倒せない。

　しかしいまや文明が崩壊し、弾丸を作ることは出来ない。

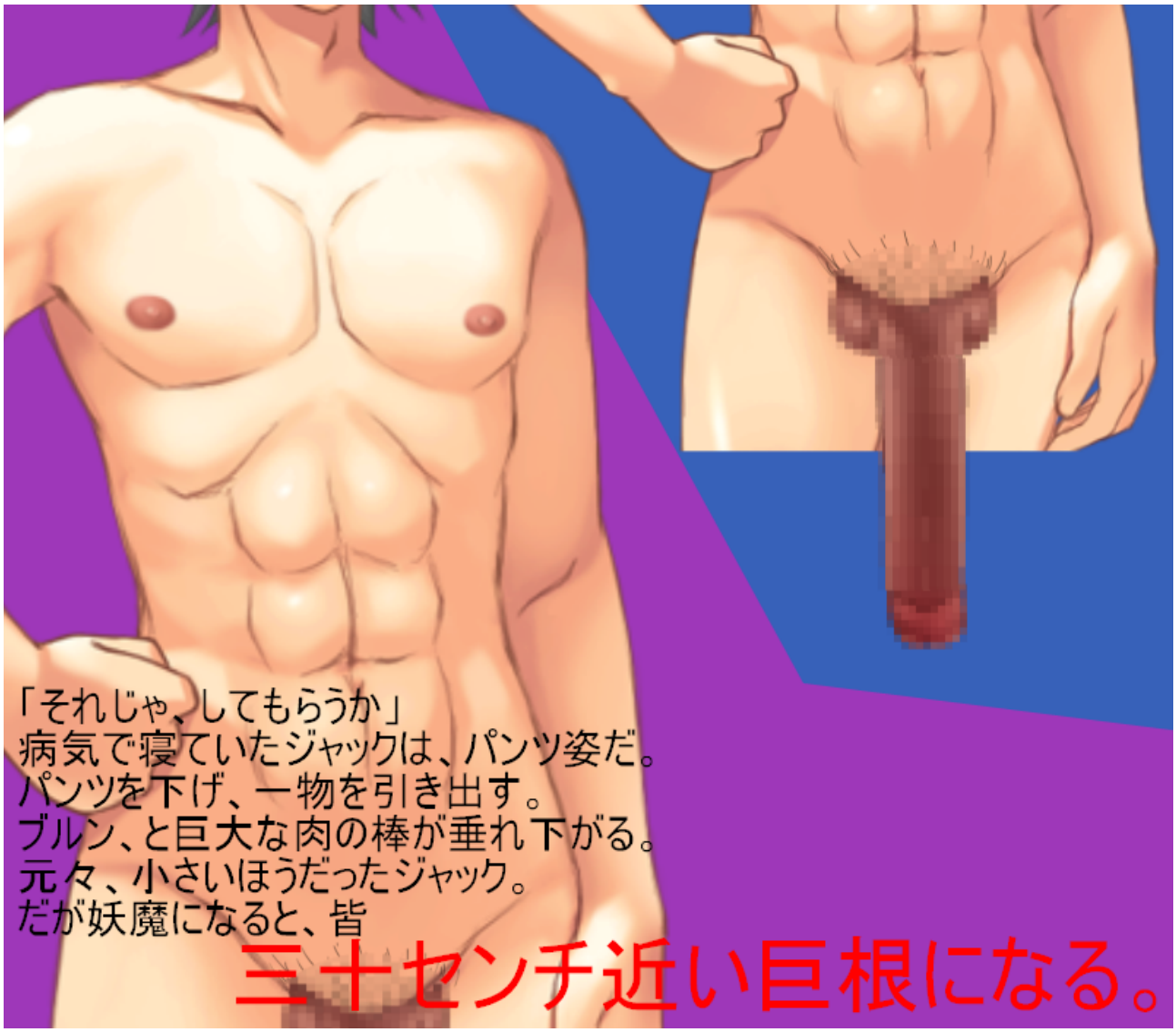
　昔のストックを使い切って、百年以上。

　ごくたまに貴重品として弾丸が売りに出されることもあるが、貧しい村に必要な数まわってくることはありえない。

　虎の俊敏さ、熊以上の腕力、そしてそれを振るって問題ない異常な頑強さ。

　それらを兼ね備えた妖魔。

一部のものは超能力すら持っている。
それを重火器無しで倒すのは不可能。
ただし、一つだけ方法がある。
彼ら妖魔の弱点。
それはパイズリだ。
いや、弱点とはいえない。
パイズリに弱いわけではないからだ。
「それじゃ、してもらうか」




病気で寝ていたジャックは、パンツ姿だ。
パンツを下げ、一物を引き出す。
ブルン、と巨大な肉の棒が垂れ下がる。
元々、小さいほうだったジャック。
だが妖魔になると、皆三十センチ近い巨根になる。
その奥に、見慣れた肉玉。

唾を飲むマリア。

――キ〇タマ潰したら……

一瞬思うが、それは無理だ。

そんな動きを見せれば、即座に頭を叩き潰されて死ぬだけ。

あくまでも妖魔は「パイズリする」という女性の意思に沿わなければならないから、沿っているだけだ。

なぜ妖魔がそういう習性を持つのかはわからない。

吸血鬼が許可をもらわなければ家に入れないというのと同じようなものかもしれない。

そういう存在だというしかない。

ポロ、と涙が出るマリア。

何度も何度も、ジャックにパイズリをしてやったことを思い出す。

マリアの巨乳には、常に埋もれた。埋もれるといえるかわからないほど、ささやかな一物だった。

それが今、フェラパイズリ余裕なのだ。

巨根がそりあがる。

ひざまづき、乳房を広げて巨根を挟み込む。

温かく柔らかい雌肉に覆われた安心感に息をつくジャック。

「今からだ」

「ジャック、もうあなたじゃないのね」

「俺は俺だ」

「村の人たちを殺すなんて……ジャックじゃない」

話す内容は真剣、顔も真剣。

しかしやっていることはパイズリだ。

ムニュムニュ、柔らかい肉が左右から押し押せ、そちらは元のままの肉玉にも乳房のオマケが押し付けられる。唾を飲むジャック。

巨柱の先端に口をつけるマリア、べろーん、と舌をゆっくりと這わせ、口の中からダラダラと唾液を垂らす。

潤滑油は温かく、すぐに巨柱を伝って雌肉の谷間に流れ、先ほどよりさらに肉厚の気持ちよさを底上げする。

シュ、シュ、とすべるおかげでいい音が鳴り始める。

「おおっ、いい。やっぱりいい」

「デカチ〇ポになったから、こういうことも出来るわ」

口を思い切りあけて、亀の頭を飲み込む。

「おほおおお、フェラパイズリ……これが……あふあっ！」

マリアの舌がゆっくりと頭の周りを回る。

横、上、下、舌のそれぞれの部分を押し付けてくる。鼻息が股間に当たり、縮れ毛がそよぐ気がした。

上目遣いのマリア。涙をこぼす。

――イって、ジャック。そして死んで……

一分。

パイズリで一分でいけば、妖魔は死ぬ。

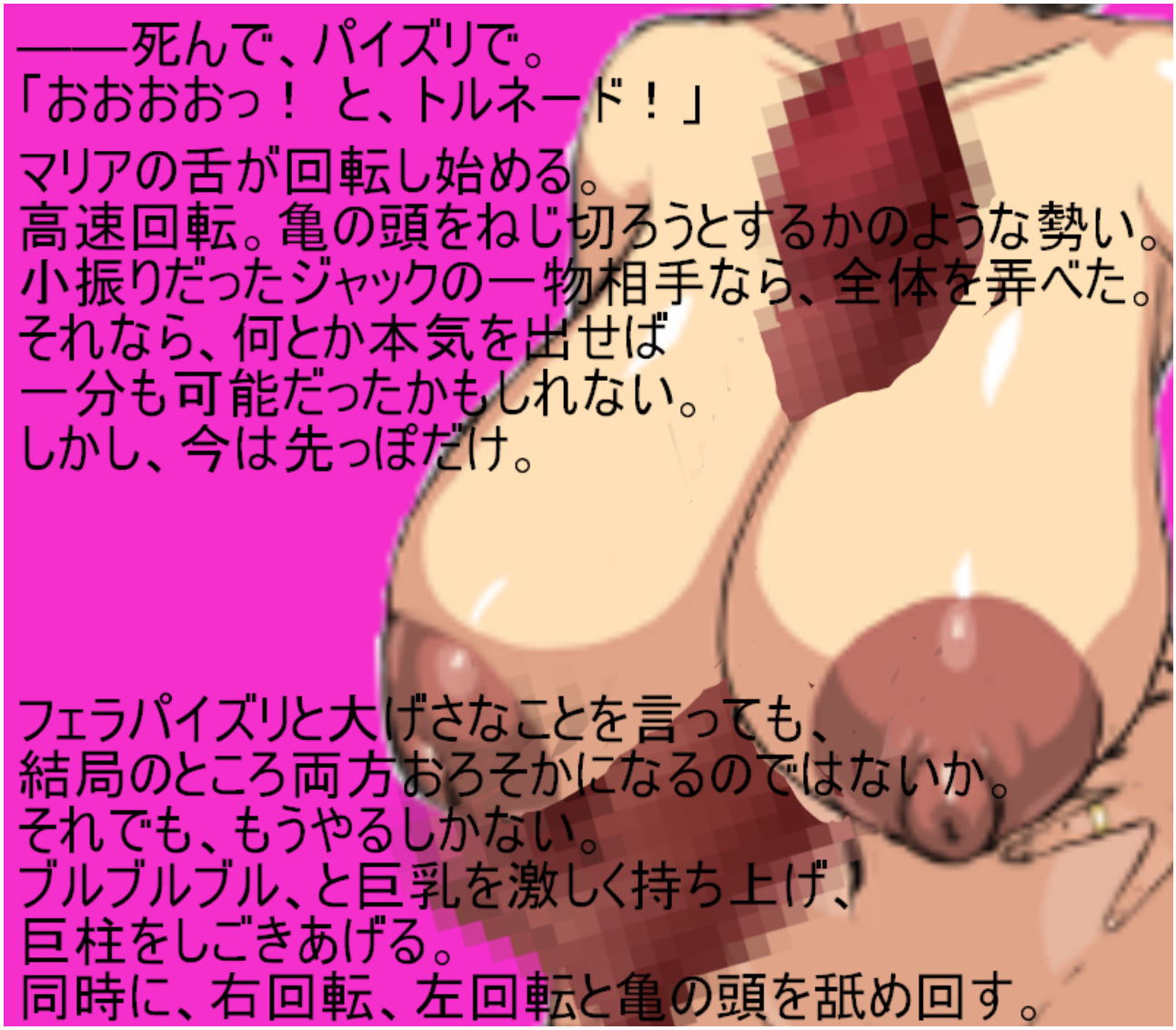
妖力が逆流して死ぬのだ。

いや、その辺りの細かいことは妖魔たち自身も知らない。

だが、死ぬことは確かだ。

どんな強力な妖魔であろうと、それは変わらない。

――死んで、パイズリで。




「おおおおっ！　と、トルネード！」

マリアの舌が回転し始める。

高速回転。亀の頭をねじ切ろうとするかのような勢い。

小振りだったジャックの一物相手なら、全体を弄べた。

それなら、何とか本気を出せば一分も可能だったかもしれない。

しかし、今は先っぽだけ。

フェラパイズリと大げさなことを言っても、結局のところ両方おろそかになるのではないか。

　それでも、もうやるしかない。
　ブルブルブル、と巨乳を激しく持ち上げ、巨柱をしごきあげる。
　同時に、右回転、左回転と亀の頭を舐め回す。
「おほおおおお！　いい、いいぞ！　気持ちいい！　でも……」
　ポン、とマリアの頭の両側に手を置くジャック。
「もう一分経ったなあ」
「あ、まって」
　ゴチャ、とマリアの頭が音を立て、原型を留めなくなる。
「さあて、こんな村にいてもしからない、出て行くか」
　笑うジャック。
　その目から涙がこぼれる。

体験版終わり

次は主人公による爆乳パイズリです
妖魔ジャックとパイズリバトルとなります

続きは製品版でお楽しみください